

# 鬼滅の刃とBloodborne

がるがんでい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

炭治郎達が煉獄杏寿郎に会うために乗った列車。

その中に、目覚めを迎えた狩人が居たら。

そんな妄想を思いついたので書き始めました。

# 目次

無限夢列車での出会い	1
無限夢列車での戦い	13
上弦の鬼との戦い	29
戦後の一幕・蝶屋敷にて。	42



## 無限夢列車での出会い

ガタンゴトンと規則正しく揺れる汽車の中で、コレまでのことを思い返していた。

一言で簡単に言ってしまうえば、過酷な運命に翻弄された。となるのだろうか、そんな物で片付けられる物では無かった。

重い病を患い、その治療法を求めて藁にもすがる思いで遠く異郷の地へと赴くのは、今思ってもよく生きていられたものだ。

日に日に重くなる体を引きずり、言葉も通じぬ土地へと長旅をするのは正に死と隣り合わせだった。

ほうほうの体で“ヤーナム”へとたどり着き、そこで“血の医療”を受けた……のだらう。

前後の記憶は朧気で、治療を受けたであろう日の記憶に至ってはまるで思い出すことが出来ない。

だがしかし、治療を受けたという確信は確かにあり、実際に長年に渡って体を蝕んで居た病も完治しているようだ。

治療を受けたであろう翌日の、あの目覚めは決して夢なんかでは無いのだから。

(“血の医療”により病は治りはしたが、やはりあの土地の人々は排他的だった)

異邦人である自分にひどく冷たく当たり、敵意を隠そうともしないあの態度はとても堪えた。

だから治療が終わった後すぐに帰路についたのだ。

(それだけではない。“ヤーナム”に長居するのを恐れたのもある)

住人の態度には無い。あの土地に、ひいてはそこにある何か異質なモノに、である。臆気な記憶の中“狩り” “青き血”といった単語が頭にこびり付き離れない。

それが意味するモノは思い出すことが出来ないが、“血の医療”に強く関係のあるものであつたはずだ。

これらの単語から記憶を辿ろうとしても、上手くいかない。まるで悪夢を思い出そうとするが如く、ぼやけて霧散してしまう。

さておき、行きよりも遥かに軽くなった体でただ帰るだけ、というのも勿体無い気がする。

あの長い旅路は、目的地にたどり着くだけで精一杯で、楽しむ余裕は欠片もなかった。だから、アチラコチラに足を伸ばし、旅を楽しむことにした。

こんな極東の地で汽車に揺られているのも、それが理由である。

この国の言葉はかなり特殊であつた。しかし、思いの外すんなり覚える事ができた

め、会話に苦勞することも無い。

自分はこんなにも頭に良かったのか、とも思うが、何か、誰かに正しい知識へと導かれているような。そんな奇妙な感じもする。

(さて、降りたら何を見て回ろうか)

思考を切り替えて、これからの予定を考える。

そうすると、奇妙な一団が目に入る。

猪の頭皮を頭から被った子供が大声を上げている。どうやら、汽車に乗るのが初めてのようだ。

獣の頭皮を頭から被る。ということが何故か頭に引つかかる。

興味を惹かれ、観察しているとどうやら他にも二人、彼の仲間が居るらしい。

その二人が誰かを探して居る素振りを見せた次の瞬間。

「うまいー！」

とたかやかな声が響く。

どうやら、駄弁の味に興奮しているらしい。

その後も、「うまい！ うまい!!」と何度も声上げながら食事を続けている。

なんとも騒がしい人が居たものだと思っていれば、先の三人がその人の下へと向かう。

どうやら、探し人は彼だったらしい。

猪の少年達は声の大きい青年の席の側へと座ると、何やら話をし始める。

青年の声が大きいため、内容の一部が耳へと入ってくるが、流石に意味までは分からない。

しかしながら、なんとも愉快な一団である。見ていて飽きない。

——彼らのあとを追いかけてみるのも面白いのか。

と行動方針が決まったところに車掌が来る。

切符を渡して、切ってもらおう。何の変哲も無い一幕。

そのはずなのだが、やけに切符を切る音が響いたと思うと次の瞬間。

ノイズ混じりの記憶が、ぶつ切りになった声が、吹き出すように頭の中を駆け巡る。

『君は、ただ、獣を狩ればよい』

『どこもかしこも、獣ばかりだ……』『はじめまして。狩人様』

『だが君は正しく、そして幸運だ』『見たまえ！ 青ざめた血の空だ！』

『……我ら血によって人ととなり、人を超え、また人を失う』

『知らぬ者よ かねて血を恐れたまえ』

『死体漁りとは、感心しないな』

『おお、素晴らしい！ 夢の中でも狩人とは！』



『呪いと海に底はなく、故に全てを受け入れる』

『我らの脳に瞳を与え、獣の愚かを克させたまえ』

『ああ、これが目覚め、すべて忘れてしまうのか……』

『……さらばだ、優秀な狩人』

『あなたの目覚めが、有意なものでありますように』

時系列さえ曖昧な、凄まじい量の情報が頭の中に溢れかえる。

『獣狩』 『医療教会』 『悪夢』 『上位者』 『瞳』

などという治療の日の夜。いや『獣狩の夜』の事をどうして忘れていたのだろうか。

あの長い長い夜の中で『狩り』を全うしたことを、なぜ今の今まで思い出すことができなかつたのか。

あふれかえる記憶と忘れていたことへの驚きに呆然としていると、聞き慣れた、たつた今思い出した声が耳を叩く。

「お久しぶりです、狩人様。 ですが、貴方はお目覚めになられたはず。なぜ、ここに居られるのですか？」

間違いない。あの悪夢の中で自分のことを助けてくれた人形の声だ。

それならばと、気を取り直して周囲を見渡してみれば。

予想通り、あの夢の中だ。墓石と花と、燃え落ちた工房。

あの日以来一切思い出すことができなかつた、その光景が目の前にある。

「……狩人様？ どうされましたか？」

人形が首をかしげる。あまりに反応を返さないため、少し困ってしまったようだ。

だがしかしなんと言えば良いのか。自分でさえ状況は理解できていないのだ。

直前の記憶があるために、輸血を受けたあと目覚めた時よりも訳がわからない。

——いや、あのときの訳のわからなさも相当なものだった。

閑話休題。

汽車の切符を切ってもらった次の瞬間ここに居るといふ状況は変わらない。

であるならば、そこに何かあるというのが流れである。

そう思い切符を取り出そうと体を探れば、今の姿が先程までの姿と変わっていること  
にようやく気づく。

狩人として獣を狩り続けた、悪夢に囚われていた時に最も好んで身につけていた、官  
憲隊の隊服。

そして背には愛用していた仕掛け武器の一つ、回転ノコギリ。

もしかやと思い試してみれば、あのときのように何処からか武器を持ち替えることもで  
きる。

それはともかくとして、切符を取り出してみる。

奇妙な何かを感じるが、だからといってそれが何かまではわからない。

高まった啓蒙によって、見えないものを見てしまう事があるが、何か見えることもない。

もはや何も答えることも出来ず、再び呆然とすることしか出来ない。

「君、なぜここに居る？　君は確かに死に、目覚め、悪夢から解放されたはずだろう？」

異変を感じ取り、ゲールマン老もやってきたようだ。

狩人の助言者である彼ならば、何か知っているかも知れない。

もとより、彼以外に助言を求める事ができないと言い換えても良い。

「極東での旅の途中。汽車の中で切符を切つてもらつた次の瞬間ここに居た。これがその切符だ」

と事実を簡潔に伝え、切符を渡す。

流石のゲールマン老もこれだけの情報ではなんとも言えないのか、少し考え込む。

「……濟まない。これだけではほとんど何も分からない。だが、言えることもある」

「君は何らかの事態に巻き込まれ、*“夢”*を見させられた。その時に、ここへと繋がつてしまったのだらうよ」

「だから君は今、夢を見ているだけに過ぎず。体は無防備だらう。そして今は獣狩り

の夜でもない。目覚めをやり直すこともできないだらう」

「だから君、早く目覚めたまえよ」

道理だ。しかしどのように目覚めたものか。

あの時のように介錯をしてもらうのが良いのだろうか。

いや、それこそすべて忘れてしまっただろう。あの時のように。

それでは意味が無いだろう。今この夢を見て、異変に気づけたのだから。

「でしたら、墓石より目覚めれば良いのでは無いのでしょうか？」

人形が何事でもなように言う。しかし、墓石には使者が居ない。

水盆には使者が居るため、あれらが何処かへ消えてしまったというわけでは無いのだろう。

獣狩りの夜であれば、使者が目覚めへと導いてくれていた。

やはり獣狩りの夜でなければ、使者は目覚めへと導いてくれないのだろうか。

「そちらではありません。こちらです、狩人様」

どうやら今までの墓石ではなく、新たな墓石に使者が居るらしい。

人形に導かれ墓石の前までたどり着くと、使者の見慣れた姿が目に入る。

どうやら目覚めの場所は、汽車の中。眠りに落ちた場所らしい。

「気をつけたまえよ、君。何か異常なことが起こっているのは確実なのだから」

ゲールマン老の忠告を背に、夢から目覚める。

目覚めてすぐに目に入るのは、眠りに落ちた乗客たち。

どうやらこの眠りは、無差別にばら撒かれたらしい。

より状況を把握しようとして、周囲に意識を回した次の瞬間。

「起きろ！ 起きるんだ!!」

先の愉快な一団の一人である痣の少年の声が聞こえる。

相当な大きさの声であるに聞わらず、他の人が起きる気配は無い。

いや、違う。彼らの側に居た数人が、目覚めたようだ。

「だめだ二人共起きない!! 煉獄さ……」

起きない少年二人を諦め、青年を起こそうとした彼に対して、一人の女が襲いかかる。

「邪魔しないでよ！ アンタたちが来たせいで、夢を見させてもらえないじゃない!!」

(なるほど、であるならば話は早い)

どうやらこの事を起こした存在と繋がりがあられるらしい。

そして、明確な敵意を持って少年と相対している。

人を襲うのならば、己が目的の為に他者を害するのならば。

ついでに、狩人に襲いかかってくるモノは。

「狩る」それだけだ。

「何してんのよアンタも！ 起きたら加勢し……」

その言葉を言い切る前に、強く金属がぶつかり合う音が響く。

少年の抜いた刀により鎚鉾が止められたのだ。

「……………ふむ。この女達が、この眠りの犯人では無いか?」

鎚鉾を引き、少年に問う。マトモな理由なく襲いかかったとなれば、血に酔った狩人として狩られてしまうだろう。

本当は犯人であつても犯人でなくても、*“狩つて”* しまえば話が早いのだが。

しかし少年は、有無言わずに襲撃者を殺す気はサラサラ無いようだ。というよりも、こちらの方を警戒しているようにも見える。

「違う! この人達は人間です!」

「どうか何なんですかいきなり! そんな変な桶みたいなモノ被つて!」

どうやら身に着けた鉄兜の外見を不審に思つて、余計な用心をさせてしまつていらしい。

(よもや、外見に突つ込まれるとは)

確かに *“長の鉄兜”* は逆さにしたバケツのような外見をしている上、片目だけしかのぞき穴が無いという、

機能性をかなぐり捨てたような外見をしているが、そこまで警戒されるとは。

*“狩人”* は皆様々な格好をしていたため、外見を気にする者などヤーンナムでは皆無

だったため、そのおかしさを忘れてしまっていたらしい。

少年と話を続けようかとも思うが、その前に呆気にとられていた女たちが正気を取り戻す。

「アンタがトロトロしていたせいで人が増えたじゃない!! 結核だかなんだか知らないけどちゃんと働きなさいよ!」

涙を流し立ち尽くす男に対し、女が叱咤する。

しかし男は動く気配もなく、只々涙を流し続けるだけだ。

(結核……そういう事か)

その言葉に少年は何か気づいたのか。憐憫、そして怒りの表情を浮かべる。

次の瞬間、涙する男以外を常人の目には止まらぬ速さで気絶させると。

「この人達は、鬼に唆されていただけでなんです。たぶん、幸せな夢の中を見させてあげて、心につけ込んだんです」

「だから、そんなので殴る必要なんてありません。気絶させるだけで十分です」

少年は自分に対する害意が全く無く、襲撃者達に対しても必要以上に攻撃する意志が無いと判断したのか。

最低限の警戒をしつつ、向き直る。

(この人から、とても強い血の匂いと死臭がする。それと生臭いような、よく分からない

い匂い)

(嗅ぎ続けたら鼻がどうにかなりそうだ。 だけど鬼の匂いはぜんぜんしない)

何か嫌な臭いでも嗅いだかのように、顔をしかめる少年。

(何者なんだこの人？ 血鬼術の眠りを自力で破ったみたいだけど、鬼殺隊じゃないし。なんであんな棍棒持つてるんだ?)

少年の頭の中でグルグルと思考が回り始める。

しかしどれだけ考えようとも、結論が出ることはなく。

結局の所はこの鉄兜は一体何者なのか、それが分からなければ何も始まらないと気づいたのか。

意を決した表情でこちらに話しかけてくる。

「俺は竈門炭治郎です。 あなたは何者なんですか？」



## 無限夢列車での戦い

「俺は竈門炭治郎です。あなたは何者なんですか？」

少年、炭治郎にそう問われた狩人。

何者か、何者であるかと少し考え込む。

そして自分の名前を思い出せないことに気づく。

何故と思うが、特に問題がある訳でもない。名前など長い夜の中で吊ってしまったのだらう。

「そうだな……私はヴァルトールという。昔ヤーナムという地方で狩人をしていたが、つい先程まではただの旅人だったよ」

故に先代の長の名前を借りる。狩りの夜に蠢く汚物すべてを、根絶やしにする為の協約。

汚物の中に隠れ蠢く、人の淀みの根源をである“虫”を踏み潰し駆逐する為の連盟。

その長の名が、今のこの状況に相応しいだらう。

「“やあなむ”の“ぼるとおる”さん……もしかして異人さんですか？」

顔が分からず、流暢な日本語を話しているが故に気づかなかったのか、異邦人である

ということに少し驚いたようだ。

そして人は予想だにしない事態に遭遇すると、少し動転してしまうものである。

（異人さんに今の状況をどう説明すればいいんだ？ 鬼って言って通じるのか？ 棍棒は持つてるけど、鬼には通じないんだ）

（大丈夫だ炭治郎！ 異人さんでも話は通じている！ 俺はできる！）

少し最初の考えとはズレた思考になっている炭治郎であるが、眼の前の人間が会話の通じるとわかって、少し安心した為でもある。

「今この汽車は鬼に襲われていて、とても危険なんです。 鬼っていうのはですね、特別な刀か日光でなければ殺す事ができない化物で……」

持てる知識をすべて動員して、ヴァルトールへと今の状況と、その元凶である鬼、それを殺す為の鬼殺隊についてまで説明する炭治郎。

「ですので、ここは俺たちに任せてここでじっとしていて下さい」

「できれば煉獄さん、伊之助、善逸。この人達を起こしてもらえると助かります」

「彌豆子は俺の妹です。鬼ですが決して人を襲ったりしないので安心して下さい」

「彌豆子もみんなを起こしてくれ。では！」

言うが早いか、客車から飛び出て行く炭治郎。

取り残されたヴァルトールは、取り敢えず言われた通りに、炭治郎の仲間三人を起ここ

す手段を探すことにする。

先程の騒ぎでさえ起きなかったのだ。並大抵の事では起きるはずもなく、何らかの手順を踏む必要があるだろう。

「……ふむ、その男。貴公は何か知らないだろうか？」

一つ一つ探していく時間は無いだろう。既に襲撃を受けている最中なのだ。いつ何が起こるか分からない。

だから、情報を知っていそうな存在へと問いかけた。

そう、襲撃犯の一人。先程から目に涙をたたえる青年である。

「すみません。私はそういった事は何も知らされていません」

非常に申し訳なさそうに、返答する青年。

だが、何か思い当たるフシはあるのか。続けて言葉を紡ぐ。

「ですが私達は、鬼が作った縄を使って眠りに入りました。そして他の人は、綱が燃えて切れたから目覚めた、んだと思います」

「私は彼が自力で目覚めたから引つ張り起こされただけなので……」

自信が無いようで、言葉に力は無い。だが、嘘偽りを言っている様子もない。

先の襲撃に加わらなかつた事といい、襲撃犯の一人としては疑問も残る。

何か改心するようなことでもあつたのだろうか？

「……たぶん眠りに入った原因。切符をどうにかすれば、目が覚めるんだと思います」

そう、言葉を締めくくる。非常に有益な情報だ。

夢の原因となったあの切符。ヴァルトールがあの時感じた奇妙ななにかが、鬼の気配と言う物だったのだろう。

「ふむ。ならばまずは切符を探す」

いそいそと、三人の体を弄り切符を探し出すヴァルトール。

術の発動条件に、切符を切って“鋏痕”をつける。ということがあるせいか、上着のポケットの中などわかりやすい所にしまわれていた為、簡単に見つけられた。

それをすぐに破り捨て、三人に声をかけてみる。しかし未だ起きる気配はない、破り捨てるだけでは駄目なようだ

「であれば燃やす、というのが正解か？ さて、ヤスリは今持っていたか？」

青年の、綱が燃えて切れたから目覚めた。という言葉ヒントに切符の残骸を燃やすことにする。

その為に『発火ヤスリ』という、手にした武器に炎を纏わせることのできる、特殊なヤスリを持っていたかと探していると。

「……うー!!」

猿轡を噛ませた少女。禰豆子が手から血を滴らせて、切符に血を付けた。

すると血が爆ぜるように燃え始め、切符を焼き尽くす。

(ほう、まるで時計塔のマリアのようだな)

血と炎という組み合わせに既視感を覚え、炭治郎の妹であり鬼であるという禰豆子を改めて見る。

獣のように人を襲う様子は無く、虫がいる様子もない。

炭治郎が人を襲わないと言い切るのも理解できる、安全な存在のように感じられる。  
禰豆子に意識を向けていたヴァルトールの視野の端で煉獄が覚醒する。

「どうやら鬼の術中に落ちてしまっていたようだな！柱として不甲斐なし！穴があったら入りたいとはこのことだ！」

「その桶頭！状況を教えてくれないか！」

目覚め一番、澆刺とした調子で話し始める煉獄。

目立つ被り物をするヴァルトールが、今この状況において一番情報を持っていると判断したようだ。

その声につられて、伊之助、善逸も目を覚ます。いや、善逸は動いてはいるが未だ意識は無いようだ。

「なんだあ!!」なんでそんな変なもん被ってやがる!!」

やはりこの鉄兜は誰の目から見ても奇異に映るのか。

猪頭の伊之助にさえ、突っ込みを入れられてしまう。

### 閑話休題

ひとまず、炭治郎の仲間たちは一人を除き目覚めた。

除いた一人も戦力にはなるらしい為、鬼殺隊は戦力を完全に取り戻した事になる。

「皆起きたということにしておこうか。私はヴァルトール。貴公らに状況を説明させていたどころ」

「簡単に言えば、鬼の術を破った炭治郎が単身で鬼を殺しに行った所だ」

「私は貴公らを起こすように頼まれてね。四苦八苦してなんとか目覚めさせることに成功したというわけだ」

必要であろうことを簡単に伝える。

「いや、めっちゃ怪しいんだよお前!! なんつつーか、鬼じゃねえけど気色悪い!! すぐえべたつく感じがする!」

伊之助は警戒心を隠すこと無くヴァルトールに食ってかかる。

「なるほど! 助かった! だがしかしあと俺たちに任せてほしい! ここからは鬼殺隊の仕事だ!!」

「今は鬼を殺すのが先だ!! 竈門少年のあとに続くぞ!」

だがしかし、煉獄の鶴の一声により伊之助はそれ以上ヴァルトールに詰め寄れない。



「どうやら、皆が既に覚醒していることを伝える為だったようだ。」

「伊之助!! この汽車全体が鬼になってる! 安全な所が無いんだ!」

伊之助の姿を見つけた勘九郎、ではなく炭治郎は即座に現状を伝える。

「なるほどな! さっきの肉はそういうことだったのか!!」

「任せろ! 親分である俺が全員助けてやるぜ!!」

《獣の呼吸》

《伍の牙・狂い裂き!!!》

天井を切り裂き、車両の中に飛び込む伊之助。

炭治郎もまた、別の車両の天井を破り車内へと戻る。

煉獄もまた、炭治郎の声を聞いた瞬間に行動を始めていた。

今いる車両をズタズタに、原型が分からない程にまでに切り裂く。

「よし! これならば鬼も再生に時間がかかるだろう!!」

狭い車両の中で、鬼となった車両のみを、瞬く間に、再生が間に合わないほどにまで切り刻むその腕。

人間離れたそれは、柱と呼ばれる鬼殺隊の最高位に相応しいものである。

「ヴァルトールさん! その棍棒といい、先の動きといい、腕に覚えがある様子! すまないが自分の身は自分で守って頂きたい!」



「黄色い少年と竈門少女はこの車両から先三両を守れ！ 俺は後ろ五両を守りつつ、猪頭少年と竈門少年に指示を出しに行く！」

一時的に安全になった車内で煉獄は素早く指示を出す。

未だ意識が眠っている善逸と、何処か幼子のようなたどしきがある禰豆子ではあるが、確かに指示を理解したらしい。

それを確認した煉獄は、落雷のような腹の底に響く轟音を立てて、その場よりかき消える。

（凄まじいな。まるで巨大な獣……いや上位者にも迫るほどの身体能力ではないか？）

（……伊之助、だったか。一跳びで屋根まで上がった少年と云い、鬼殺隊とはこのような者たちの巣窟なのだろうか）

鬼殺の剣士の身体能力を目の当たりにして、驚きの感情を覚えるヴァルトール。

ここまでの動きをするには、彼らに伝わる特殊な呼吸法。

それを極めた者だけが到れる極地であり、鬼殺隊の中でも一握りの存在なのだが、流石にそれを知るすべは今は無い。

「さて、ああは言われたが……身を守るだけでは面白く無いだろう？ 私も少々協力させて貰おうか」

誰が聞いているという訳でもないのに、ヴァルトールはそう言い、移動を始める。

何ら迷いなく後方車両へと足を向ける。一人で五両を守ると豪語した煉獄の動きを見たい、という考えからである。

次の車両の中もかなり細かく刻まれており、肉塊が再生を続けるに留まっている。

その速度はかなりゆっくりであり、煉獄が相当の損傷を与えたということが伝わってくる。

その煉獄の姿は既に無く、既に後ろの車両へと向かった後らしい。

(することが残っていないな。これでは先頭車両へと向かったほうが良かったか?)

そう思いつつも、煉獄を追い歩みを進めるヴァルトール。

その視野の後ろで、鎌首をもたげるように肉塊が肥大化する。

どうやら全体の再生速度が遅かったのは、一箇所の修復を優先した為でもあったらしい。

肉塊がヴァルトールへと音もなく迫る。

胴体を貫かんとする速さと鋭さを持ったそれは、正に致命の一撃となり得るだろう。

どうやら先んじて、動き回る邪魔者を排除する算段のようだ。

しかし、それは空を貫くに過ぎなかった。

紙一重でさえも厚いと感じられる程の距離まで迫った時、ヴァルトールが後ろへと飛び退く事で躲したのだ。

そう、後ろへである。本来であればそのような方向へ跳んだとしても回避することなどできない筈なのだ。

だが、どのような不可思議な仕組みが働いたのだろうか？ 実際にヴァルトールは無傷であり既に武器を大きく振りかぶっていた。

先程までただの鎚でしかなかったソレは今、背負っていた物と組み合わさり、回転ノコギリの名に恥じない様相を呈している。

辺縁にノコギリの歯を配した円盤を、複数に重ねたソレは、機構によって高速で回転するのだ。

金属同士が擦れ合い、甲高い音と火花を撒き散らすソレが肉塊に叩きつけられる。

ヴァルトールの臂力と合わさり、壊滅的な威力を孕んだノコ刃部分が、その役割を正しく果たす。

ただの一撃で大きくひしゃげ、大部分を細切れに削り取られた肉塊は、もはや力なく萎び、崩れ落ちた。

「やはりこの程度か。何とも面白くない」

鬼殺隊の下位の者であれば、気づくことさえ許されずに殺されていた一撃だった。

中位の者でさえ、一撃で斬り伏せるのは難しい大きさだった。

であるにも関わらず、何ら感慨を覚える事は無い。

しばらく入念に車内を見渡し、これ以上の再生は無いと判断して、次の車両へと進む。中に入りしばらくすると、また轟音が響く。煉獄が移動する音だ。

どうやら最後尾までの刻み終わり、炭治郎の居る前方車両へ向かっているようだ。

ヴァルトールは、弾丸のような煉獄の邪魔にならぬよう跳び、道を開ける。

すれ違う際その姿をよく観察するが、傷一つどころか、汗の一滴さえ流していない。

煉獄にとつても驚異足り得ぬ状況らしい。

(流石に私はあそこまで速く駆けられぬからな。乗客を守り切る事などできんだろう)

(尤も、彼らが居なければ守ろうとさえ思わんだろうがな)

狩人であるヴァルトールと、鬼殺隊である彼らとの考えの大きな相違点だろう。

確かに、どちらも人を襲うモノを殺し、夜の驚異を排除する事を目的としている。

だが、狩人は究極的には狩りの成就、「獣狩の夜」を終わらせる事が重要なのである。

人は助けられたら助ける。ぐらいのものであり、事実終わらぬ夜の中で発狂し、息絶えていく人をいくらでも見た。

人を守る為に戦う鬼殺隊とは根本的に違うのだ。

閑話休題

炭治郎及び伊之助に指示を出し終えたのだろう、煉獄が戻ってくる。

「ヴァルトールさん！ 先の車両見させてもらった！ 協力して頂き感謝する!!」

その一言を言うともた移動。  
い。 何とも忙しないものだが、状況が状況故に致し方ない。

肉塊の方はどうやら不意打ちは無意味と悟ったのか。

修復・膨張をできる限り早く、同時に複数箇所で行い、こちらの限界を越えようとしており、その速度は最初に煉獄が刻んだ時よりも確実に早くなっているのだから。

「しかし煉獄殿」

「何故彼らに」

「任せた？」

「貴公が赴けば」

「とつづくに終わって」

「いるだろうに」

往復する煉獄の邪魔にならないように、自分の疑問を投げかけるヴァルトール。

その間も肉塊を削り、潰し、乗客に被害が出ないようにしている。

何とも単調な作業な為、話してもしたい気持ちになつたのだろう。

「確かに！」

「だがこれは！」

「彼ら！ 特に！」

「竈門少年が！」

「やらねばならないし！」

「できねばならない！」

煉獄も答えはするが、流石にこの会話は少々煩わしいのだろう。

「詳しい理由は後ほど!!」と言うと、防衛に専念する。

そうして暫くの間、際限なく湧き続ける肉塊潰しをし続ける。

途中目玉が生えたりもしたが、煉獄にとつても、ヴァルトールにとつても驚異足り得るものでは無かった。

そんないたちごっこも、ついに終わりを迎えた。

汽車全体が大きくのたうち回り、そこかしこから肉塊が膨れ上がる。

首が刎ねられた鬼の、耳をつんざく断末魔が届く。

（最後の足掻き、という訳でも無い。 制御を失ったか）

（このままでは横転するな。 さて、どうしたものか）

ヴァルトールはもはや宙を舞って居る車両の中で他人事のように考える。

このまま地面に叩きつけられたとしても、肉塊が衝撃を吸収し、致命傷になることは無いとわかっている為だ。

その視界の端に、少しでも落下の衝撃を和らげる為に奮迅する煉獄の姿が映る。

(あれが鬼殺隊の持つ技か)

振るう刀身に炎の揺らめきを幻視するほどの技の冴え。

ただの日本刀で客車を押し戻すほどの膂力。

ただ純粹な修練だけで、これほどの強さを得られるという確かな証明。

それを人を救う為に、ひたすらに積み重ねてきた「淀み」なき人間。

(これは良いものを見られたな)

それを知ることができたヴァルトールは、そのまま地面へと落下する。

肉塊が衝撃を和らげたとはいえ、少なからず怪我をしたはずではある。

しかしそれを感じさせない軽やかさで立ち上がると、何かを探し始める。

程なく、目的のものを見つけることができた。

倒れた炭治郎の側にあったソレは、崩れ逝く鬼の頭だろうか。

《下巻》と刻まれた目が付いた肉塊である。

鬼の中に、確かに「虫」を見出したのだろう。

容赦無くそれを踏み潰す。

(それに比べて、何とも淀んだものだ)

執拗に踏みじった後、そばに倒れる炭治郎に意識を回す。

どうやら腹を刺されたようだ。

致命傷とは言えないが、止血しなければいずれ失血死するだろう。

そう考えたヴァルトールは、懐から、細やかな装飾の施されたハンドベルを取り出す。使用者が味方と認識した者に生きる力と、治癒の効果を及ぼす音色を響かせようと高く掲げるが。

「何をするかはわからんが、手助けは不要!!」

煉獄が止めに入る。

「竈門少年！ 全集中の常中ができるようだな！ 関心関心!!」

そのまま、炭治郎へと話しかけると何やら教えを施し始める。

どうやら、彼らの行う呼吸法を応用する事により、簡易的な止血ができるらしい

それを実際にやらせて感覚を掴ませる為に、ヴァルトールを止めたようだ。

「何とも騒がしい夜だったが……じきに日も昇る」

負傷者多数ではあるが、死者は無し。あれ程の規模の襲撃から見れば素晴らしい成果と言えよう。

果と言えよう。

であれば、もはや何も憂う事は無く。ヴァルトールは先の事を考えることにする。

「さて、夜が明けたらどうしたものかな？」



## 上弦の鬼との戦い

「さて、夜が明けたらどうしたものかな？」

その言葉を待っていたかのように、煉獄の踏み込みよりも大きな音が響き渡る。

突然のことではあるが、即座に音の発生元を確認すれば。

衝撃によりもうもうと土煙が上がる中心に、人の姿がある。

全身に施された紋様に似た入れ墨とが特徴的な男は、瞳に《上弦》《参》と刻まれている。

上弦の鬼は間髪を入れず、未だ動くことの出来ぬ炭治郎へと襲いかかる。

《炎の呼吸》

《貳ノ型・昇り炎天》

炭治郎の頭を潰さんとする鬼の拳を、真下から斬り上げる事によって防ぐ煉獄。

拳から、肘の辺りまでを裂かれた鬼は、後ろに二・三跳び距離を離れた。

一瞬にも満たぬ攻防。その小休止の隙を突くようにヴァルトールは動く。

(速い！)

炭治郎が驚嘆する、それほどまでの速さ。

鬼に迫るほどの速度で大きく飛び込み、火花を散らすノコ刃を叩きつける。

並大抵の鬼であれば為す術もなく叩き伏せられ、血肉を撒き散らす事になる一撃のはずであったのだが。

流石は上弦を冠しているだけの事はある。切られた腕を盾にして防ぐ。

《炎の呼吸》

《壱ノ型・不知火》

押し切らんとするヴァルトールと、振り払おうとする鬼。

その一瞬の膠着を縫うように煉獄が刃を振るう。

純粹な踏み込みからの袈裟斬り一閃ではあるが、それゆえに速く、鋭い。

「話さえさせてもらえないとはなー」

それらの攻撃に対して、流石に不利を悟ったのか。

鬼は大きく飛び上がり、仕切り直しを図る鬼。

《破壊殺》

《空式》

空中で虚空を殴ったかと思えば、その衝撃が変わらず煉獄達に襲いかかる。

《炎の呼吸》

《肆ノ型・盛炎のうねり》

煉獄はその一つ一つを、渦のような太刀筋で切り払い、撃ち落とす。

ヴァルトールは、飛び退き、隙間を縫うように移動をすることで回避試みるが、流石に数発貫つてしまう。

「ぐっ」

足を止めたヴァルトールに対し、さらなる追撃が重なる。

遠当てとはいえ、鬼の脅力の乱打には流石に耐えきれず、その場に倒れるヴァルトール。

こうなると、不利になるのは煉獄だ。

遠間から攻撃できるとなれば、煉獄は打つ手が少ない。

(ならば近づくまで！)

着地の一瞬を狙い、また距離を詰める煉獄。

そのまま至近距離での剣戟へと持ち込む算段だ。

「そつちのノコギリ野郎と違って、お前は素晴らしい！」

幾重にも打ち合わされる、拳と刃。

互角に思えるその競合いだが、煉獄は決死であり、鬼には余裕が見える。

無尽蔵の体力を持つ鬼に、夜明けまで粘れるはずもなく、致命傷以外はまたたく間に

治癒してしまう。

煉獄にできる勝ち筋は、乾坤一擲の大技を繰り出して、早期に決着を着けるしか無い。しかしそれは成功しようやく、凌がれた時点で負けが確定する、危険な賭けである。それでも、賭けに挑むしか無い。

……ヴァルトールが居なければ。

打ちのめされ、倒れ伏して居たはずであるのに。

まるで無傷のように飛び起きるヴァルトール。

そう。死んでさえ居なければ、狩人はいくらでも戦えるのだ。

(死んでしまえば、流星にそれで終わりだろう。 獣狩の夜はもう明けたのだから)

太ももから輸血液を体内に流し込み、体力の回復を行う。

その様子を見ていた炭治郎が、傷の癒える様を見て驚愕をしたのはまた別のお話。

「いくら削つても意味がないとは。厄介なものだな」

ヴァルトールの目には、何が見えているか。

ノコギリの一撃が、煉獄の猛攻が、鬼の命が全くと行ってよいほど削れていないという事が、視覚的に分かっているようだ。

そんなヴァルトールの手には、先程まで振るっていた回転ノコギリは影も形もない。

如何な奇術を使ったのか、大振りな西洋剣がその手中にあった。

「ならば、これならばどうだ？」

その言葉とともに、西洋剣が耳慣れぬ奇怪な高音を響かせ、燐光を纏う。

元の幅の数倍の刀身を成形した輝きは、青き月光を思わせる。

始まりの狩人が導きと信じた聖剣。

その内に宿す宇宙の深淵は、正に神秘であり、世の理を大きく歪める。

これならばあるいは、鬼にも癒えぬ爪痕を刻めるだろうか。

遙か宇宙の神秘を湛えた月光。

それを掲げたヴァルトールは鬼へと飛びかかると、煉獄は示し合わせたように身をひねり、ヴァルトールと入れ替わる。

鬼はその一撃を無視して、隙を見せた煉獄へと追撃しようとするが。

(なんだ!? この異様な感覚は!?)

それは鬼になって久しく感じることもなかった恐怖心である。

生命としての本能が、あれは危険だ。と警鐘を鳴らしているのだ。

死なぬゆえに鈍麻になった危機感が、ようやくそれに気づいた時には、月光は既に目前であった。

(何かがまずい!!)

紙一重のところで飛び退き、回避を試みる。

その跳躍で刃の圏外へと、辛くも逃れた筈で有るのに。

切っ先が届いていないのに、鬼の身体は見事に切り裂かれた。

これこそがこの聖剣の秘めたる神秘の一端。

月光が暗い光波を刃と<sup>して</sup>迸らせたのだ。

「ぐああああああああつ???'」

大きく吹き飛ばされる鬼<sup>!!</sup>。だがその勢いを利用し、距離を離して再び仕切り直す。

傷も見ると見る内に癒えて行くが、その速度は先程までよりは遅い。

確かに月光の一撃は、鬼の生命力を大きく削ったようだ。

「鶴瓶頭……貴様一体何者だ!？」

顔に筋が浮き出るほどの怒気と焦燥を隠さぬままに、鬼は問う。

傷は未だ治りきらず、消耗も激しい。鬼殺隊ですら無い人間にここまでしてやられるとは露程にも思っていなかっただろう。

だからこそその疑問。これ程までの強さを持つものの正体、気にならぬほうがおかしい。

「ふむ、そうさな。私はヴァルトール。ヤーナムという地方で狩人をしていた、しがない旅人だ」

対してヴァルトールは淡々と答える。

鉄兜により表情は見えぬが、見えていたとしてもそこから汲み取れる物は皆無である

う。

「ばるとおる……いや、ヴァルトールか。 覚えたぞ！ 貴様の名前！」

鬼は足を開き腰を落とすと、右手のひらを前に出し、左拳を腰当たり構えを

何らかの格闘術の構えなのだろうか。 鬼であるというのに、そのような技を修めて

いるのは珍しい。

基本的に鬼は血鬼術と身体能力による強さに重きを置く。

あるいは、そのような技量を高めていったからこそ、上弦にまでなったのだろうか。

### 《術式展開》

### 《破壊殺・羅針》

雪の結晶のような紋様が鬼の足元に展開される。

その様相にヴァルトールは特に接近を躊躇う。 足元が炸裂して吹き飛ばされる、な

どの経験が頭をよぎったからだ。

煉獄もまた近寄れない。 身震いするほどの鬼気が、先程までの死闘の疲労がそれを

許さない。

煉獄がチラリと炭治郎達の方を見やれば。 この凄まじいまでの圧力の中で呼吸を維

持するので精一杯のようだ。

音を聞きつけて戻ってきた伊之助もまた、入り込む隙を見つけられずにいる。

しばしの硬直。　始めに動いたのはヴァルトールだった。

懐より虫の湧いた、柔らかな人の眼球を取り出したかと思えばそれを擦る。

見る人が見れば、精霊によって祝福された物らしいその瞳は、その奥に吹き荒れる隕石を一つ放出する。

「無駄だ！　そんな手品、俺には通用しない！」

高速で迫る神秘の隕石だったが、鬼は先の空式で触れること無く叩き落とす。

「ヴァルトール！　貴様はたしかに強いだろう！　だがそれは鍛錬によって練られたものでは無い！」

お返しとばかりに、鬼はヴァルトールに高速で迫る。

それに対し前に飛び、交差するように後ろに回る事で攻撃を回避しようとするが。

「だから技量が足りない！　力と異能による戦いしかできない！」

先読みされたのか、移動を知覚されたのか。

身体にかかる慣性を強引に無視して反転した鬼は、跳んだ先に重ねるように拳を叩き込む。

これはヴァルトールが、これまで戦ってきた獣が弱いという訳では全く無い。

確かに既に人型を超越した獣、もはや人ですら無いモノ。人を遥かに超えた上位者達との戦いが主だったが、人の姿をした者も十分に狩っている。



千景の狩人、時計塔のマリアなどの強者さえも撃破しているのだ。

只々、鬼の戦い方がヴァルトールと相性の悪いモノであっただけである。

吹き飛ばされるヴァルトール。そして鬼に肉薄する煉獄。

まるで先程の焼き増しのようなであつたが、そこからの流れはまるで違う。

《炎の呼吸》

《伍ノ型・炎虎》

《破壊殺》

《乱式》

もはや燃え上がる虎さえも幻視させる、煉獄の袈裟斬りと、機銃の如き速度の鬼の連打。

その2つがぶつかり会う瞬間、銃声が響き渡る。

転がり起きたヴァルトールの銃撃である。

放たれた散弾は鬼の体勢を僅かに崩しただけに留まったが、その僅かな崩れこそが分水嶺となつた。

「卑怯者があ!!」

決して浅くはないものの、上弦との戦いの中では軽症と言い切つてしまえる怪我を負つただけの煉獄。

対して、なんとか繋ぎ止めたものの、頸に大きな切り込みを入れられた鬼。

しかも傷の治癒も遅々として進んでいない。急所の回復に充てるだけの力も不足しているのだ。

既に日の出まで一刻の猶予もなく、鬼の敗北は明白な事実である。

「貴様！……この卑怯者が!!」

しかし鬼は、そんな事よりも。後ろから撃たれた、という事実で怒り狂う。

「ヴァルトール！……お前だけは絶対に殺す!」

しかしそんな怒り狂った獣の相手こそ、ヴァルトールの真骨頂である。

吹雪のような鬼の猛攻をすり抜けるように跳び、回避して行く。

(なるほど。卑劣な行為を嫌悪しているようだ。であれば、そこを煽ればより冷静さを失うか?)

回避の最中に鬼の怒りの原因を推察し、冷静な判断をさせぬよう、より激昂させよう  
と考える。

「……卑怯とは。心外だな、鬼よ。貴様らなぞ、人よりも遥かに高い身体能力で、弱者を斃り殺し、喰らう。そんな獣の如き下劣さなのだろう?」

「同じステージにすら立たず、一方的な貴様らこそ。よつほど卑怯と言うべきではあるまいか」

一度大きく離れ、輸血の時間を稼ぐと共に言葉を投げかける。ヴァルトールの放つ言葉の刃。それは正に火に油を注ぐが如くであった。自分が卑怯と罵られた事が、そこまで我慢ならなかったのか。鬼はもはや残る力すべてを注ぎ込むかのごとく力を溜める。

「俺が卑怯だど?! 鍛錬を続け! 正面から戦い! そして勝利する俺が卑怯だど?!」

《術式展開》

力を溜めている僅かな時間。

ヴァルトールが月光を放つには短すぎ、散弾さえ意に介さない剛体。

動き始めの僅かな隙に銃弾を叩き込み、大きく体勢を崩させる銃。パリイと呼ばれる狩人の技術でもって迎撃を試みるが。

「巫山戯るなよ!! 貴様のハラワタ全て引きずり出してやる!」

《破壊殺》

《滅式》

音さえも置き去りにする、強力な右拳。

初動さえ知覚できぬそれは、二発目の散弾が放たれる前に終わってしまう。

只々殺られる前に殺るといふ事を突き詰めたその一撃は、宣言通りヴァルトールの腹を貫通した。

「ヴァルトールさん!」「ぼるとおるさん!」「桶頭!!」

そのまま腕が引き抜かれ、ヴァルトールは倒れ伏す。

吹き出る血によって赤く染まった鬼は、大きく息を荒らげている。

「ハアーツ! ハアーツ! 思い知ったか! 卑怯者!」

しかし、怒りの原因を排除したことによりだいぶ落ち着いたのである。

流石にヴァルトールを食うだけの時間も余裕もないが、返り血を舐めて失われた力の回復を図る。

……ヴァルトールの血に、どれほどの力があつたのか。それだけで頸がまたたく間に繋がってしまった。

「残るはお前たちだ。 日が昇る前に皆殺してやる」

炭治郎、伊之助を庇うように前に出る煉獄。

だがしかし先のヴァルトールへの一撃は、煉獄をもつても防ぎきれるか怪しい。

それでも、後輩の盾になることに一切の躊躇なく。 炎の呼吸の奥義をもつて迎撃の構えとする。

「本当に、殺すのが惜しいな、柱。 一分の隙さえないその構え、鬼となれば更に高みに迫り着くだろうに」

その言葉とともに、先と同じように力を溜める鬼。

その後ろでヴァルトールがまたも立ち上がる。

流石に狩人をもつてしても危うい一撃ではあったが、生きているのならば風穴程度は問題ではない。

流石に風穴が空いてなお立ち上がるとは思っていなかったのか。

幾度目かの驚愕と共に振り返る鬼。そんな鬼の目に、何かを握りしめたヴァルトールの右手から、よく分からない触手のようなものが召喚された瞬間が映る。

「うおおおおおっ!？」

喚び出されるがままにのたうつ触手。 何ら感情も、意志もこもらぬそれに、為す術もなく吹き飛ばされる鬼。

もはや誰も、何も言うことができない。幾度と無く立ち上がる不死性にも似た耐久力と、繰り出される異能に誰も彼も疑問が尽きない。

ようやく姿を見せ始めた太陽から逃げる鬼を咄嗟に阻止しようとする煉獄ではあったが、圧倒的跳躍により辛くも森の中へと入られてしまう。

「ぼるとおるさん。あなたは一体……?」

炭治郎の疑問が優しく降り注ぐ陽光の中に溶けていった。

## 戦後の一幕・蝶屋敷にて。

「ばるとおるさん。あなたは一体……?」

降り注ぐ陽光の中に、炭治郎の疑問が溶けていった。

「ちよっ!? ちよっと待って!! 何があったの!! 鬼?」

黄色い頭髮が特徴的な少年、善逸が慌ただしくこちらにやって来たからだ。

善逸は煉獄を見つけると、そのボロボロの姿に大きく驚く。

「汽車の鬼とは別だよね!! なんて煉獄さんそんな大怪我してるの!! っていうか、何その人! 恐っ! なんでバケツ被ってるの!」

捲し立てるよう騒ぎ立てる善逸は、ヴァルトールの姿を見ると怯えたように伊之助の後ろに隠れてしまう。

「なに!? 本当に人間!? なんか湿った水音が聞こえる気がするんですけどお  
おとおお!!」

「ほら! なんかしとり、しとり聞こえるんだって!!」とひたすらにヴァルトールへの恐怖感を隠さぬその姿に、場の空気が何処かふやけたようになってしまった。

これにより自分の後ろで騒がれている伊之助も、ようやく自分の空気を取り戻したの

か。ヴァルトールへと食って掛かる。

「てめえ！ この桶頭！ なんでそんな平気な顔してんだテメエ！ さつき腹ぶち抜かれてただろうが!!」

そう言つて、ズンズンとヴァルトールへと歩いて行く伊之助。

ここでようやく炭治郎も我に返る。が、しかし。聞きたい事、気になる事、怪しい事が多すぎて、何を言つて良いのか判断がつかないのか。

「二人共！ ばるとおるさんに失礼な事言うな！ 見た目も何もかもが凄い怪しいけど、助けてくれた恩人なんだぞ!!」

取り敢えず騒ぐ二人を静かにさせようとするが、自分もまたかなり失礼な事を言っているのに気づいていないようだ。

そんな賑やかな少年三人組を見て、クツクツと笑い声を上げるヴァルトール。

「テメエ！ 桶頭！ 何がおかしい!!」

笑われた、と言うことが癪に障ったのか。伊之助の声が更に大きくなる。

「いやなに。貴公らの賑やかさ、見てて飽きぬものだと思つてな」

「何とも仲が良いものだ」と面白がっている事を隠そうとしない。

「誰が仲良しだ！ 余裕かましやがつて!! 俺と戦え！ その言葉取り消させてやる

!」

その言葉、その様子にもはや伊之助は、先の上弦との戦いも忘れたかのようにヴァルツールに向かっていこうとするが。

「ちよつと何考えてるの!? 絶対ヤバイ人じゃん! あの人! 殺されるつて! つて  
いかか巻き込まないで! お願い!!」

慌てて善逸が伊之助を羽交い締めにして止める。

「待て待て待て! 伊之助! それは不味い!!」

遅れて炭治郎も止めに入るが、腹の傷が開かないようにしているため善逸ほど実力行使ができない。

何とも和やかな空気。 日が差すまでの死闘が嘘のようである。

(ふむ、何とも平和なものだ)

放つて置けば、そのままずっと騒ぎ続けていそうな三人組ではあったが、流石に煉獄が止めに入る。

「全員整列!!」

有無を言わせぬ覇気に満ちたその一言で、騒ぎをピタリと止めて言われた通り整列する三人。

「いやはや濟まない! ヴァルツールさん! 俺の後輩が失礼した!!」

煉獄はまず三人の非礼を詫びるとヴァルツールに対して頭を下げる。



「そして感謝する！ 助力して頂き、本当に助かった！ ヴァルトールさんが居なければ、俺は殺されていただろう!!」

その言葉で浮ついていた伊之助と炭治郎は気を引き締めなおす。

鬼殺隊の頂点である柱が、自分たちの遥か上に座する実力者が死を覚悟する程の強敵。

現実離れた戦いではあったが、ヴァルトールはそんな鬼と渡り合っていたのだ。

「え!? 何!! そんなヤバイ鬼が来たの!? っていうかあの人そんな鬼と戦ったの!? そんな人に喧嘩売るなよ伊之助! 死ぬ気!」

ただ一人、善逸だけは先の戦闘を目撃していなかったのだが、煉獄の言葉に恐れおののく。

「煉獄殿。貴公が居なければ私も殺されていた。

と言うよりも、貴公が私に合わせてくれたから、皆生き残る事ができたのだ。礼を言うのはこちらの方だろうよ」

少々騒がしい善逸を背景にしつつ、ヴァルトールもまた感謝の意を示し、右手を差し出す。

その言葉に煉獄は頭を上げると、その右手をしっかりと握り返す事で答える。

「そう言ってもらえると助かる! ヴァルトールさん! しかし俺が助けられたのも事

実！ お礼をしたい！ 我が家へ来ていただけないだろうか!!」

手を握りながら煉獄は、溢れんばかりの熱意を込めてヴァルトールを家へと誘う。

その後ろで善逸が明らかにホッとした表情を浮かべる。どうやら自分たちはここで解散になると考えたようだ。

「ふむ……構わんよ。私としても、落ち着いたところで話をしたかった所だ」

その言葉を聞いた煉獄は、「ならば早速！ 皆も付いてこい！」並ばせた三人に言い、ヴァルトールと後輩三人衆を連れて自宅へと向かおうとする。

しかしそれを聞いた善逸は、顔を真っ青にして首を振る。

「ちよちよちよちよちよっ!!! 俺たちも行くんですか!?! そうだ！ 怪我!! 炭治郎の

怪我が酷いんで！ 俺たちは蝶屋敷に炭治郎を送ります!! 送らせて下さい!」

ヴァルトールがよっぼど恐ろしいのか、炭治郎を言い訳にして同行を避けようとする始末である。

その言葉に煉獄は、合点があったと言うような顔をして頷く。

「そうだったな！ 竈門少年も静かにしていれば大丈夫だろうが、軽症では無かった!

先に治療をするべきだった!」

今度こそヴァルトールと離れられると良いな、と祈る善逸。

煉獄も怪我をしているが、致命傷と言える傷は無いようなので、自宅で療養すればす

ぐに良くなるだろう。

ヴァルトールはさつき伊之助が腹をぶち抜かれた云々を言っていたが、血まみれとは言え今も平然としているしきつと見間違いだらう。

そう自分に言い聞かせて、煉獄の次の言葉を待つ。

「ヴァルトールさんも一緒に来ていただけじゃないか!? 大丈夫なのであろうが、やはり目の前で腹を貫かれたのを見てはな!!」

だがしかし、現実は無情であった。

「俺も治療をしなければいかんしな」と、快活に笑いながら言う煉獄に、ヴァルトールも同意する。

「何処でも構わんよ、煉獄殿。そういうことだ。まあ、諦めたまえよ。善逸」

最後の方はくつくつと笑いながらであり、明らかに怯える善逸をからかっている。

そして望みを断たれた善逸は、「イ、ヤ、ア————ツ」と高らかに叫び声を上げるのであった。



“蝶屋敷” 柱の一人である胡蝶しのぶの持つ邸宅であり、負傷した鬼殺隊員の治療所として開放されている。

そこまでたどり着いた一行は、まず炭治郎と煉獄が治療を受けることになった。

炭治郎は傷が深くはあるが、止血も済んでいるため屋敷に在中しているアオイ達の治療を受ける。

ヴァルトールもまた、軽い診断を受けたのだが。目立った外傷が無かったため、別室で待機してもらおうという流れになった。

伊之助と炭治郎は、特に酷い怪我もないため、少しの休息の後に鎧烏の指示を受けて、近場の鬼を狩りに向かうことになった。

そうして、煉獄の治療のためにわざわざ戻ってきたしのぶは、傷だらけの煉獄に質問を投げかける。

「あのヴァルトールと言う人、本当に腹部を貫かれたんですね？ 煉獄さん。傷どころか、服も破れていなかったんですが」

煉獄ほどの実力者であれば、わざわざ柱の治療を受ける必要など無く、炭治郎と一緒にアオイ達の治療を受けるだけで良い。

それなのに戻ってきた理由は、煉獄と話し合う事と、ヴァルトールを調べる為である。「なんと！ いや、確かに腕で腹を貫かれていたのだがな！ よもや服まで無傷とは！

何とも不思議な!!」

眼の前で腹を貫かれた筈の人間が、既に無傷であるという事実には驚いている、のだから。

普段とあまり変わらぬ様子で、自分の目で見た事実を伝え、しのぶの疑問へ答える。

「煉獄さんが嘘をつく理由も無いですし…… 人間なんですか？ あの人」

貫かれていたと断言されてしまえば、傷が治ったと考えるしか無いのだが。

腕で腹を貫かれた人間が本来生きていられる筈もなく。万が一、命を繋いだのだとしても。

細い錐で腹を刺された炭治郎が未だ治療中なのだ。既に完治している事など有り得ない。

……人間であるのならば。

「鬼で無い事は確かだな!! 日光の中でも何とも無かったのだから!! だが、人間かと言われれば! どうなのだろうな!!」

鬼殺隊の宿敵である鬼ではないと断言をする煉獄であるが、人間だと言い切ることはしなかった。

理由としては、異様な回復力や奇妙な異能を使いこなして戦う姿を見た、というものがある。

しかし、それだけでは無い。炭治郎達、特に善逸のヴァルトールに対しての反応が煉獄の頭にあつた。

「竈門少年達かな! 人とは何処か違うと言うのだ!! 黄色い少年なんて、怯えてマト

モに近づけない始末だ!!」

蝶屋敷までの道中。炭治郎達から、ヴァルトールへの違和感の原因を聞いていた煉獄。

匂いが、触覚が、音が。彼らの特化した感覚器が、ヴァルトールが何処か人間からズレていると告げているらしい。

その報告を受けてなお、ヴァルトールが人間であると断言をする事が、煉獄にはできなかった。

「……そう、ですか。それで、煉獄さんは彼をどう思っているんですか?」  
あつげらんかんとした様子で、人間か怪しいと答えられてしまったしのぶ。

鬼でないからよし。などとはしのぶには言えず、煉獄がヴァルトールをどう考えているのかを問う。

「そうだな! 彼は命をかけて鬼と戦い、人を守った! 故に俺はヴァルトールさんを信じるし、協力してもらいたいと考えている!!」

信じると言い切った煉獄。その言葉の中に、いつものよりも遥かに強い力を感じたしのぶ。

いつも何処を見ているのか、イマイチわかりにくい煉獄の眼も、今回はしつかりとしのぶを見つめているのだ。

「分かりました。それでは私も、その方向で彼と接しますね。そうは言っても、私は煉獄さんほど彼のことを信じられませんけど」

その強い意志に屈した。という訳では無いが、煉獄に合わせることにするしのぶ。

実際、隠や鏝鳥からの報告でも、ヴァルトールが敵対的な存在では無さそうだと結論付けられている。

だがしかし、実際に自分の目で見た訳でもなく。あまりにも怪しいその立ち姿に警戒しないというのは、不可能な話だろう。

「胡蝶はそれで良い!! それで、次の緊急柱合会議についてなのだが!!」

一先ず、この場においてのヴァルトールの扱いが決まった。

しかし柱二人の話が終わる訳でもなく。上弦の参との遭遇と、その戦い方。そして、上弦の鬼と渡り合える異邦人。

鬼殺隊の柱として共有し、話し合わなければならぬ重要な案件である。

そのため、緊急で柱合会議が行われる事になったのだ。

「4日後に決まりました。お館様はできればヴァルトールさんにも来てほしいそうですが」

傷の手当をしながらしのぶと煉獄の話し合いは続く。



一方、話の中心となっているヴァルトールであるが。

通された別室の中で、壁に寄り掛かり眠りに落ち、夢を見る。

夢の中で目覚めた狩人は、獣狩の夜の時のように、作業台にて工房仕事に勤しむ事にした。

先の戦闘で使った回転ノコギリと月光の聖剣。これらの武器の消耗具合の確認をするのは、狩人として当然のことなのだ。

「……狩人様、ゲールマン様が大樹の下でお待ちです」

そんな狩人の背に、人形が声を掛ける。

ゲールマン老が、狩人の事を呼んでいるとのことだ。

「……そうか。ならば向かわねばな」

一通りの整備が終わった後に狩人は呼ばれた場所へと向かう。

そう。ゲールマン老の介錯を受け入れ、目覚める事になった場所へ。

大樹の下にて車椅子に座っている片足の老人は、やって来た狩人を見つけると。

「……君、使ったのだろうか？ 三本の三本目を」

静かな、しかし重厚な圧力を放ちそう問いかける。

いや、問いでは無く確認である。ゲールマン老は既に確信しているのだ。

狩人が、三本目のへその緒と呼ばれる遺物を三本使い、人として上位者と伍する存在



に成りかけている事に。

でなければ、説明がつかない。

東の果てに住まう鬼という存在の術程度で、只人がこの夢に辿り着く事など有り得ない。

たとえ道標になる物があろうとも、だ。

「……好奇心に負けた。だが、最後の最後で恐ろしくなったのだ」

ゲールマン老に見抜かれているのであれば、もはや取り繕う必要など無い。

故に狩人は正直に話す。上位者という超常の存在に惹かれ、しかし人を失う事を恐れた事を。

「……良い。我ら血によつて人となり、人を超え、また人を失う 知らぬ者よ かねて血を恐れたまえ」 君は、最後の最後に踏みとどまったのだから」

狩人の言葉で、放っていた圧力を収めるゲールマン老。

「だが、気をつけたまえよ。 君は人を失つてはいないが、既に人を超えてしまっているようだ」

そして優しく狩人にそう忠告をする。

「君はまだ狩りを続けるのだろうか？ 極東の島国で。 であるならば、決して飲まれぬようにしたまえ」

狩人はその言葉に頷くと、踵を返して自らの墓石へと向かう。

飲まれぬように、とゲールマン老は言ったが、狩人は早々飲まれまいだろうと言う確信があつた。

炭治郎達や煉獄と言つた、歴とした人間がいるのだから。彼らと共にあれば、大切な物を見失うことは無いだろう。

「……それに、虫を潰さねばならんからな。飲まれてなどいられまい」  
連盟員として重要なことである。あの淀みきつた鬼どもを殺し、汚物の中に住まう虫を潰す。

虫の根絶させるために、この狩人は鬼を狩るのだ。

そうして狩人は目覚める。

ヴァルトールとして、鬼を狩る為に。